四万十町の光を発信するフリーペーパー

りぐらんと

vol.18

TAKE FREE

四万十町の光を発信するフリーペーパー

りぐらんと

01 高校生の現実をまっすぐ歌うロックバンド

02 注文があれば何でも作れる十和の建具職人

03 第3回 協力隊キャンプ部

04 第7回 四万十食材図鑑

05 あの店の、モーニング

このまちにはいろいろな光がある
大きいものから小さいもの、
強いものから弱いもの
そんな光の反射角度を変える
私たちだからこそ見える
光を発信していきます
りぐる「念を入れる」
時には全力を出して、時には力を抜いて
右に左に傾いて、それでいいんだ
りぐらんと　りぐらんと

01 高校生の現実(リアル)をまっすぐ歌うロックバンド

下元愛(しもともあい)さん
山脇百華(やまわきももか)さん
山本梨代菜(やまもとりよな)さん

筆者が四万十町に移住して、初めて参加したイベントが松葉川の川開き。イベントのライブ会場で歌っていたのが、窪川高校音楽部の3人により結成されたガールズロックバンド『アカネサス』。高校生離れした力強い演奏にたちまち魅了されてしまいました。

独自の世界観と勢いを武器に年間30回以上のライブを行い、数々の賞を獲得。大手レコード店でもCDが販売されるなど、多くの人を魅了する彼女たち。今、日本で大注目の高校生バンドの原点とは？

Editor / Ryuto Toriumi
Photographer / Takahiro Hashimoto

バンドときっかけ

音楽に興味を持ったきっかけを伺うと、ギターボーカルの下元愛さんは、「中学生のときにいとこと一緒に行ったカラオケで上手いと褒められ、それから毎日歌うようになった」。

ベースの山本梨代菜さんは、「小学4年生のときに見た須崎高校軽音部の演奏に感動し、興味と関心を抱いた」。

ドラムの山脇百華さんは、「人前で歌うのが苦手でしたが、同じ中学校で仲の良かったボーカルの愛さんと休み時間に歌うことは楽しかった。高校を選択するときに愛さんに一緒に軽音やろうと誘われて」と3人が語ってくれました。

由来と誇り

バンド名は3人で光の当たる場所に行き輝いていけるようにと、万葉集の一節からとって『アカネサス』に。窪川高校の先輩バンドである『愛ヲ菓子（いとおかし）』、『カミヒトエ』に続く和をイメージした5文字の中で考え、高校1年生の初めに前顧問の先生と話し合って決めたそうです。

しかし、決めた当時はバンド名に違和感があり、気に入ってなかったそう。活動を続けるなかで、周りの方に認識してもらえるようになり、SNSで応援・称賛のコメントが寄せられるのを見て、『アカネサス』の名前に誇りや愛着が持てるようになったと百華さんは話します。

音楽部と先輩

窪川高校音楽部への入部を機に楽器を始めた３人。自分たちが実際に演奏するようになって、初めて先輩バンドの凄さを知り、憧れと尊敬の念を抱いたそうです。

県内の高校生が出場するライブを見ても、「窪川高校の先輩バンドが１番カッコよかった」と思ったそう。窪川高校は基本的にバンドごとで練習するため、先輩に直接教えてもらうことはあまりなかったそうです。それでも、ライブパフォーマンスを見よう見まねで練習して、ひたすら先輩の背中を追いかけたと愛さんはいいます。

原点と想い

『アカネサス』の原点を聞くと「聴いてくれる人がいることと、自分たちがバンドをしていて楽しいということが活力になっている」と愛さんは話します。また、梨代菜さんは「メンバーを喜ばすことが好きで、２人のために頑張れている」といいます。

しかし、実際は高校生活の中で人間関係や学業、周りの目に悩み、メンバーが離れていくのではないか？と不安になったことがあったそうです。そのため、まずは自分たちの居場所をつくれるようにバンド活動にはげんだといいます。愛さんは「メンバーと離れたくなかったし、離したくなかった」と当時を振り返り、百華さんは「今では、自分たちの最高の居場所になっている」と話してくれました。

この経験が『アカネサス』の「音楽を通じて、誰かの居場所をつくりたい」という熱い想いに繋がっているといいます。高校生ならではのリアルな体験と率直な想いが多くの人の心を打つ演奏になっているのだと感じました。

夢と感謝

メジャーデビューという大きな夢に向かって、高校卒業後も音楽の道を歩んでいく3人。今後は県外での活動に力を入れていくそう。これからも謙虚さを大切にして活動していきたいといいます。「いつかは、四万十町の方に自慢に思ってもらえる存在になりたい」と願う彼女たちから、取材中も四万十町や周りの方に対する感謝の気持ちが強く伝わってきました。多くの方から支持される理由もそこにあるのかもしれません。

周りからの期待を背負い、この町から夢に向かって挑戦する彼女たち。将来、何万人もの観客の前で輝けるように、ひたむきに努力するその小さな背中をこれからも応援していきたいと思いました。

結び

取材中、本当によく笑い、仲が良い彼女たちから、代表曲「アサガオ」の花言葉である、固い絆で結ばれている3人組という印象を受けました。

また、恋バナが好きな等身大の女子高生という顔とは別に、音楽に対するストイックさを感じました。普段からライブを意識して全力かつ冷静に演奏したり、1つのミスを泣きたくなるくらい悔やんだりしたことを聞くと、上手くなりたいという純粋な想いがすごく伝わってきました。

高校生活のすべてをバンドに打ち込んだという彼女たちの飾らない歌詞と力強い演奏は、きっと今日も聞く人のこころに響いていることでしょう。

自然豊かな田舎町の物静かな高校、北舎4階音楽室から始まった小さな奇跡はこれからどんな展開を迎えるのか。今後もこのストーリーのヒロインである『アカネサス』から目が離せません。

02

注文があれば何でも作れる十和の建具職人

芝 孝伸（たかのぶ）さん

皆さんは建具職人とは、どのような仕事をする人かご存知でしょうか？

筆者は四万十町に移住するまで、大工の他にも製材屋や建具屋という職種があることや、それぞれ違う仕事を担っていることも全く知りませんでした。

しかし、協力隊として関わる中で、職人の皆さんが自分の仕事に責任と誇りを持ち、何より楽しんで仕事をされている姿を見て、どのような経緯でその仕事をするに至ったのかとても興味を持つようになりました。

今回はその中でも建具屋という職を選び、故郷十和で工場を営む、芝孝伸さんにお話を伺いました。

Editor / Kanae Hoshi
Photographer / Takahiro Hashimoto

建具職人とは

建具屋の仕事は主に、建具（戸、扉、障子など、開閉機能を持った仕切り）を製作し、現場に取り付けるというものです。新設のほかに、修理や調整も手掛けます。

建物や家具、木工製品を作るときに必要な木材を、丸太から板材や角材に加工する製材屋や、母屋の骨組みや外壁、床などの下地を設計図通りに造る大工のような力仕事に対して、建具屋は精密さと手先の器用さが求められる仕事です。

きっかけ

1960年に四万十町（旧十和村）で生まれ、中学卒業までを地元で過ごした芝さん。「若いころは田舎よりも町へ出たかった」。それが職人としての基礎を学ぶ、職業訓練校へ進むきっかけとなります。中学卒業後すぐに就職する人も多くいた時代。そのような中で職業訓練校を選んだのは「手に職をつけたい！」という想いからでした。

長男だからいつかは家を守るために地元に帰ってきてほしい、そんな父親の願いもあり、いつかは帰らなければと考えていた芝さん。当時、地元に家具屋（家具を作り、現場に取り付ける職人）がなかったこともあり、家具屋なら田舎でも仕事ができるだろうと、主に家具作りを学ぶ職業訓練校へ進みました。

しかし実際には家具屋の需要は少なく（オーダーメイドよりお店で買ったほうが安いため）、もう一つの選択肢であった建具屋になることを決めたのです。

安芸市・高知市で技を磨く

２年間の職業訓練校を終え、最初に就職したのは安芸市にある工場でした。なぜ安芸市へ？と尋ねると、「県外へは出ずに地元に残ってほしい」と願う親へのせめてもの反抗だったと笑って答えてくださいました。

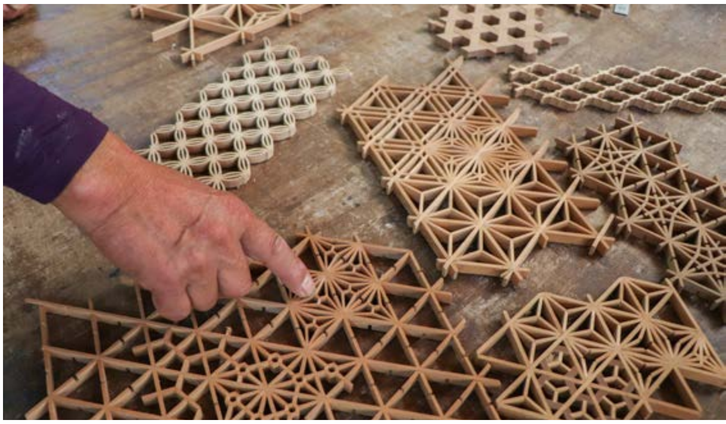
安芸市にある工場の親方のもとで５年ほど修行し、６年目からは一人の職人として同じ工場で働いていたそうです。その後、「もっと細かい仕事がしたい！」と、より技術の高い、組子などを多く扱う高知市内のお店に職場を移されました。

「職人の世界は、技術を優しくは教えてくれない。１教わったら残りの９は見て覚えろ、の現場。組子の技術も任された仕事をこなす傍ら、上の人の仕事を盗み見ながら覚えたものだ」と当時を振り返っておられました。

組子とはどのようなものか、我々取材班は工場に置いてある見本の作品を見せていただきました。細かい木片を釘や金具を使わずに組み合わせ、様々な文様を作っていく繊細な伝統技法。取材班一同「すごい！細かい！！」としばらく見入ってしまいました。

大工に技術を認められ

高知県土佐市にある寺院、四国八十八箇所霊場の第三十六番札所でもある青龍寺。その境内にあ



る三重塔の建設に芝さんは半年間携わっていました。三重塔を担当していた大工にその技術を認められ造りに行ったそうで、心柱には携わった他の職人の名前に並び、【建具師芝孝伸】の名も残されているそうです。

三重塔完成時に記念に撮影した、名前が入った心柱の写真を見せていただきましたが、実際にその心柱を見ることができるのは、なんと塔が壊れた時とのこと。あと100年くらいかなぁと語る表情からは、後世に自分の仕事が残る誇らしさや嬉しさが感じられました。

好きな仕事をこれからも

今からおよそ20年前に十和に戻り、実家近くに建てた工場で、甥の松元健一さんと共に建具屋を続けている芝さん。主な仕事先は高知市内や四万十町内、仕事が絶えることはなく、忙しい日々を送っていますが、それでも昔と比べると建具屋の仕事は減っているといいます。

「昔は大工さんも活気があったがよ。自分が弟子だったころは、室戸・安芸・奈半利の方で漁業がとても栄えていてたくさん家も建っていた。漁師さんは見栄っ張りな人が多いから（笑）雨戸やガラス戸も木製にしたり、組欄間を作ったりしていた」。和風建築が多かった時代から、木製をあまり使わない時代になっている現代。低費用で建売する住宅メーカーが増えたのもその要因の一つです。

しかしながら芝さんの建具や組子の技術は素晴らしいもので、丁寧で繊細な仕事ぶりにはとても驚かされます。何より物づくりが本当に好きなのだなというのが、作業をする姿からも感じられます。夕方までは通常の仕事をし、その後は「遊びの時間だから」と深夜まで物づくりに没頭する時もあるそう。

協力隊活動をしながら自分が本当にやりたい仕事は何だろうと模索中の筆者にとっては、そこまで夢中になれることを仕事にされている芝さんが羨ましいと感じるくらいでした。

時代が変わり需要が変わっても、変わらない職人の技術。その素晴らしさを伝えるお手伝いを協力隊として出来たらなと思います。

03

協力隊キャンプ部

第3回 久木ノ森山風景林

Editor / Kanae Yamada

Photographer / Takahiro Hashimoto

協力隊キャンプ部第３回目は、大正中津川地区の久木ノ森山風景林。渓谷沿いに約16万㎡の面積を持ち、多様な天然木で構成された貴重な森林域です。キャンプ場に行くまでは車一台通れるほどの狭い道を行きますが、隣には川底が見えるほど透き通っている中津川と美しい木々の風景が続き、ドライブコースとしてもおすすめです。

取材日当日は天候にも恵まれ、美しい紅葉の中で絶好のキャンプ日和でした。紅葉スポットとしても多くの人が訪れる久木ノ森山風景林は、黄色く色づいた葉っぱがぱらぱらと舞い、思わず見惚れてしまうほど美しい光景でした。そんな美しい久木ノ森山風景林でのキャンプの様子をご紹介していきます。

久木ノ森山風景林の特徴

久木ノ森山風景林の特徴はなんといっても大自然！電波も入らない山奥でマイナスイオンに囲まれて行うキャンプは非日常を感じさせ、心を癒してくれる時間を過ごせます。周りが木々に囲まれていて、風があまり吹かないのでテントが張りやすく、トイレも完備されているので初心者にもおすすめです。

焚火でできるアウトドアスイーツ

今回はキャンプで作れる「リンゴのアップサイドダウンケーキ」に挑戦しました。リンゴとホットケーキミックスで生地を作り、飯盒で簡単に作れます。生地を入れた飯盒を焚火の上に丈夫な木の枝で吊るし、弱火～中火でじっくり焼いていきます。火加減が難しく少しリンゴが焦げてしまいましたが、外で作った焼き立てのケーキは格別で特別な時間を過ごせました。アウトドアスイーツというと難しい印象ですが、基本的なキャンプ道具で簡単に作れるので、ぜひ挑戦していただきたいと思います。

焚火を囲んでキャンプ飯

夕食は地元の食材をふんだんに使用した鍋とさつまいもご飯。ピリッと効いた生姜が身体を温めてくれて、星空を眺めながら贅沢なひと時を過ごしました。

最後に

実は、筆者はキャンプ初体験。最初は不安もありましたが、今日のキャンプブームで快適に過ごせるグッズがたくさん出ており、キャンプ初心者でも気兼ねなく体験できます。

四万十町には魅力あふれるキャンプ場が多数あるので、ぜひ自分のお気に入りのキャンプ場を見つけに行ってみてはいかがでしょうか。

さてさて、次回のキャンプ部はいったいどこに行くのでしょうか。お楽しみに！

久木ノ森山風景林

四万十町大正中津川
【お問い合わせ】
0880-27-0111
【施設設備】
湧き水・トイレ
【駐車場】
あり

04 四万十食材図鑑 第7回 大正いごはちの鮎めし

燻製した鮎は味がぎゅっと濃縮され、少量でもしっかり風味を感じられます。鮎といえば塩焼きが定番ですが、ひと手間加えた鮎めしは食卓が華やぐ一品に！炊飯器で簡単にできるので、ぜひ試してみてください。レシピを教えてくれた方は、大正打井川在住の秋田やよいさん。地域応援団としてイベント出店などを行うグループ「いごはち」のリーダーとして活躍されています。野菜・お米・お茶など様々な食材を自分の畑で作っており、今回使用したものもほとんどがやよいさんの自家製でした。

材料

米	2合
鮎	1尾
昆布	3cm角
薄口醤油	大さじ1
酒	大さじ1
※塩	小さじ1

作り方

1 鮎を焼く。※手間をかけるときは鮎を半燻製（七輪などで3～4時間燻す）したものを使う。
2 米は炊く30分前に洗い、ザルにあげておく。
3 炊飯器に米、調味料を入れてから水を加える。焼き鮎と昆布を入れ15分ほど置いてから炊く。
4 炊きあがったら鮎の身をほぐし、刻んだ昆布、小口切りにしたねぎをのせる。

※鮎は塩焼きを使用する場合、調味料の塩を控えてください。醤油はお好みで牡蠣醤油や出汁醤油に変えても美味しく作れます。

05 あの店の、モーニング

いつもと違う
１日のはじまりを、
四万十町の
モーニングでいかがですか。

ケルン

四万十町中央ICを降りてすぐ左手に位置し、町内外から幅広いお客さんに愛され、モーニングでは珍しくトンテキ丼・朝カレーとガッツリメニューが楽しめるお店。女性に嬉しいサラダプレート、オムレツなど洋食屋さんならではの朝食で充実した１日が始まりそう。

平串 347-2
定休日　／月曜日
営業時間／８時～17時
電話番号／0880-22-9811

なごみ

志和地区唯一の喫茶店である古民家喫茶「なごみ」。モーニングにでるトーストにはその季節によって採れた蜂蜜やジャムが付くのが嬉しい。モーニングだけでなく定食にも付くわかめスープは、どこか懐かしいホッとする味わいでまさに「なごみ」を与えてくれる。

志和 427
定休日　／金曜日
営業時間／９時～17時
電話番号／0880-24-1070

道の駅四万十大正であいの里

地元で収穫できる食材をメインに、地域の方が愛情を込めて作った手料理が自慢。大自然の中で育まれる食材と清流「四万十川」を眺めながら、モーニングをお楽しみいただけます。ご飯がすすむ「手作り味噌」、温かいおにぎりと相性抜群で、そのまま食べても◎

大正 16-2
定休日　／なし
営業時間／８時30分～17時（変更有）
電話番号／0880-27-0088

Editor / Saki Nishimura

Photographer / Saki Nishimura

協力隊便り

土佐大正駅のハロウィン

こんにちは。大正商店街にぎわいづくり担当の西村です。

土佐大正駅は木造の趣深い駅舎をしており、県外からも多くの人が訪れます。そんな土佐大正駅をもっと盛り上げていきたいという想いから、昨年に引き続き10月末にハロウィンイベントを開催しました。

昨年はまち歩きをメインとしたイベントでしたが、今年は大正駅の通路を活用して地域の方が作ったジャックオランタンを展示し、コンテストを開催しました。

コロナ禍の影響を考慮し昨年に比べ規模を縮小させたこともあり、開催するまではどれくらい人が来てくれるのだろうという不安もありましたが、当日は多くの方にコンテストへ参加していただきました。また、予土線から降りてきた観光客や情報を聞きつけた四万十町外から訪れた県内の方にも写真撮影などを楽しんでいただき、その様子を見るとやった甲斐があったと達成感を感じました。

今後は駅から商店街のにぎわいづくりに繋げるため、駅舎の活用により力を入れていきたいと思います。またイベント等開催しますので、その際はぜひ土佐大正駅にお越しください。

Editor / Ryuto Toriumi,Kanae Hoshi,Kanae Yamada,Aki Yoshioka,Saki Nishimura

Photo&Design / Takahiro Hashimoto,Saki Nishimura

Publisher / 四万十町地域おこし協力隊 786-0013 高知県高岡郡四万十町琴平町1-1 TEL：0880-22-3161

URL：http://shimantocho-chiikiokoshi.jp/ Date / 令和4年1月発行